

センター新刊書紹介

Rice Culture in Malaya. Symposium Series No. 1 ; Kyoto : The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, 1965. iv+72 p.

本誌第2巻第3号に特集されたマラヤ稲作シンポジウム報告の英文版である。このシンポジウムは、わが国の熱帯稲作に関心を持つ人々の間にきわめて好評をえたと聞かすが、その反響は国内のみに限られなかったようである。昨年、評者はタイ国に滞在したが、同国の稲作研究者間にも英文版報告書の刊行が待ち望まれていたものである。当然のことながら、この種のシンポジウムは欧文報告書の刊行によって、はじめて開催の意義をまっとうするものである。

和文報告がコロンプラン・エキスパートとFAO専門技術者全員19名のレポートを掲載したのに対して、本版では各パート毎の取りまとめを次の諸氏が行なっている。

マラヤにおける稲作と技術援助の概要

……松島 省三
栽培に関する研究 ……杉本 勝男
品種改良 ……佐本 四郎
土壌と施肥に関する研究 ……三宅 正紀
害虫とその防除 ……川瀬 英爾
ネマトーダ ……国井 喜章
野ネズミの防除 ……望月 正己

あらためて通読してみても、一国の稲作の全般についてこれだけの内容ある研究成果をわずかの年月で行ないうるのは、日本人研究者を除いてはでないであろうことを痛感させられる。各執筆者共、豊富なデータを短い頁数でまとめることの苦心がみられるが、それでも和文報告にもられたいくつもの貴重なデータが割愛されているのは残念である。しかし、仕事の性質上、全専門家が一贯したテーマに取りくんだ品種改良部門の報告は、Marinja や Masuri の育成経過が簡潔に理解できて、非常に興味深い。いずれにしても、本報告書は外国人、わけてもマラヤはもちろんのこと、東南アジア諸国の稲作研究者の間に多くの反響が期待される

内容を含んでいる。

元来、マラヤの稲作には（他の農業部門もそうであるが）、イギリス人の研究者が強いことが自他共に認められてきたが、本報告書や先にマラヤで発刊されて同国内で広く読まれている松島氏の *Theory and Technique of Rice Cultivation* などによって、少なくとも稲作研究部門には日本人研究者の発言がますます重みを加えることになると思われる。このことは今後マラヤの稲作の研究を本格的に始めようとしているわれわれにとって、何よりも有難いことになる。

評者もこのシンポジウム開催に少しばかりお手伝いをした関係で、本書刊行までのいろいろないきさつを仄聞しているが、とにかく最後まで困難な共同作業をなしとげた農林省、OTCA、東南アジア研究センターの3主催者と、編集の実務を担当された京大川口研究室に敬意を表したいと思う。（渡部 忠世）

Takashi Sato. *Field Crops in Thailand.* Reports on Research in Southeast Asia, Natural Science Series N-1 ; Kyoto : The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, 1966. xi+148p.

本書は京都大学東南アジア研究センターにより企画遂行された諸研究のうち、自然科学部門の研究報告書シリーズの第1号として出版されたものである。

著者、兵庫農科大学教授佐藤孝氏の熱帯諸地域の農業に関する経験は、戦時中のインドネシアにおける生活、1958年兵庫農科大学学術調査隊のメンバーとしてのカンボジア農業調査、また同国に設立された農業センター創設期の約2年間にわたるカンボジア農業研究・技術開発指導等、豊富である。本書は、東南アジア研究センターの研究プロジェクトのもとに企画されたタイ国における農業の研究のうち、主として畑作物を中心に実施された1963年10月から翌年1月までの現地調査の結果を、著者の熱帯農業に関する豊富な経験と研究にもとづいてまとめ上げられた労作である。

序章において自然的立地条件からみた熱帯農業の優位性を説いたあと、タイ国は、東南アジア地域においては例外的に植民地化された経験をもたないため、その農民の労働意欲・平均的栽培技術は同地域の他の国

ぐに比しやや高いこと、また、その政府の畑作物に関する試験研究も比較的進んでいることから、これらの背景にもとづき、同国の畑作物の将来は明るいとのみとおしをまず打ち出している。以下、作物の種類によって章をわけ、トウモロコシ、ケナフとジュート、キャッサバ、サトウキビ、棉そして最後にマメ類についてとりあげている。またそれに次いで、土壌有機物の熱帯農業における重要性を説いた一章をとくに設けたのち、終章を結んでいる。

各章の冒頭では、それぞれの作物の近年におけるタイ国内の生産の動向が、経済的・自然的条件との関連において説明され、その作物の1962年度における地域別生産量とその平均収量がそれぞれ地図を用いて示されている。ついで、現行の栽培様式および栽培技術上の諸問題が述べられている。作物の種類によって、主要な問題点は自ずからことなるが、その作物の要求する土壌・気象条件、とくに重要な養分要素とその量、栽培様式—播種時期、栽植密度、収穫期、収穫方法など—さらには生産物加工調整上の問題、病虫害、品種問題と順を追って詳細に論じ、とくにジュート、棉については、先年、著者がカンボジアでおこなった試験研究の結果が豊富に引用されている。すなわち、ジュートについては、栽培時期と収量、栽植密度と収量、品質、製品歩留りの関係について、また棉については開花・結果の習性が子細に調べられた結果、栽培時期と収量予察、栽植密度と収量の関係が極めて具体的に論じられ、はなはだ示唆に富んでいる。また各作物ともに例外なく問題となるのは水の不足と過剰であるが、究極における問題解決は大小ダムの建設による灌排水施設の完備であることに間違いはないが、現状においても、作物の感光性利用による作季の移動、または栽培様式の改良を通じ収量・品質をより高く維持できる可能性を力説している。また各作物の養分吸収特性に応じて、土壌条件、施肥条件と作物の生育・収量の関係が述べられ、施肥の要点、他作物とののぞましい輪作体系が具体的に提示されている。なおその際、著者の考え方は一貫しており、マメ科作物との輪作による地力維持を主張する。その他、栽培、収穫、収穫物調整上の諸問題について、それぞれごく具体的な当面の問題の解決策を提示している。たとえば、ごく簡単な農器具の使用によって、キャッサバ掘り出し時の損傷をさけるし、またジュート加工調整の労力削減が可能であること、サトウキビしぼりかす（バカス）

のマルチとしての利用の有用性などがこれである。農業生産力の向上のためには、国家的規模における施策と、個々の農民の側における技術改善策がひとつの車軸に結ばれなくてはならないであろう。著者は、技術論的な立場からこの車軸の両端の給油部に注入すべき油をいずれに偏することなく求めている点、評価に値する。すなわち農民の小規模におこなえるはずの技術改良の方向を常に示唆しつつ、それが十分に成果となって農民の側にかえってゆくだけの基礎が一方において熟成されるべきことを常に強調し、そのための方向づけをも提唱しているのが著者の態度である。

終章近く、とくに設けられた土壌有機物と緑肥作物の章では、畑作物のうちでもとくに土壌からの養分収奪の大きい作物の連作による地力の減退防止方法について述べている。すなわち、緑肥作物の栽培により、sub-soil 中のリン酸の有効化をはかり、緑肥による有機質の供給を得て土壌によるリン酸吸収係数の低下をはかることの有利さを力説している。各作物について扱った章の中でも、このことはしばしば強調されているが、休閑中における土壌侵食の防止、草生改良については異論はないとしても、高温・畑状態下での有機質分解の急速な進行を考えると、緑肥にどの程度具体的な期待をかけるかはさらに議論の余地がある。

最後の章では、すべての作物を通じ、その生産物の質の改良方策、生産力向上の阻害要因の摘出とその克服の方向が重ねて論議され、おわりに再び、生産力増大の具体的方法として最も安全かつ確実な道は、マメ科作物利用による有機質の土壌への供給であることを述べて結びとしている。

栽培学的見地からは、個々の作物の生育に関する著者ならではのもう一步突っ込んだ記載—たとえばジュート、棉の章においてみられるような—がのぞまれるところであり、また同国の気象要因として雨量だけでなく、日長、太陽輻射熱量、気温の年変化などのデータもあわせて示されておればより完全な参考資料となったであろう。また、些細なことであるが、巻末に Master map が付されていることを本文中に記されてあった方が、一層親切であったとおもう。しかし、以上のことはいずれも本書の本来の価値とはまったく無関係である。たんにタイ国の畑作物のみにとどまらず、熱帯畑作物を研究する者にとって、本書の価値ははなはだ大きいといえよう。 (高村 泰雄)